国語科学習指導案

指導者　　浜　岡　恵　子

日　時　平成26年11月22日（土）　第３校時（13：15〜14：05）
年　組　中学校第３学年１組　計39名（男子18名，女子21名）
場　所　中学校第３学年１組教室
単　元　「漢詩を読む。漢詩を詠む。」

単元について

小・中学校国語科教科書の改訂（平成23・24年度）に伴い，「伝統的な言語文化」に関連する教材の扱いが増えている。小・中学校学習指導要領に「充実」を求められている「伝統的な言語文化」としての古典とは，けっして遠い昔に書かれた（語られた）だけのものではない。誕生から長い年月をかけて人々が，その美しさや面白さを繋いできた現代の作品なのである。しかし，実際には古語や文法のわかりにくさなどを筆頭に，さまざまな理由で現代に生きる自分とは遠く隔たったところにあるものとのとらえが，中学校・高等学校の生徒達を古典から遠ざけている。平成24年度本校第３学年を対象にした調査でも，古典学習に対する意識は同様の結果であった。漢文に限れば，さらに漢字や漢文独特の言い回しが壁となり，なおさらその傾向は強まる（浜岡ほか，2013）。漢字の獲得はすべての学習の根幹となることは言うまでもない。しかし，正確に読むこと，書くことというスキルだけに終始していては，せっかく習得した漢字の知識を漢文学習に活かすことは難しい。表意文字である漢字の特性を活かした漢文学習を行うことで，言葉の学習としての「漢字」と伝統的な言語文化としての「漢文」の学習を関連づけ，「漢字文化」として小中の学びに位置づけることができると考える。

漢文は，簡潔さとリズムの美しさに特徴がある。原文のまま中国語で読む時はもちろん，訓読文にかえて日本語で読む時も，和語で綴られた古文とは異なる趣を味わうことができる。漢文にもさまざまなジャンルがあるが，簡潔さとリズムの美しさが凝縮されている点で，漢詩はたいへん優れている。その中でも，今回の教材として取り上げる中国唐代にできた新しい詩（唐詩）は，李白，杜甫といった詩人に代表され，日本でもなじみ深い詩が多い。唐詩が，特に読み継がれてきたのは，「句数・字数・構成・対句・押韻などの制約を設けることによって，緊密な構成と音律的な美しさを意識的に作り出そうと腐心した」（大上，2013）というように，形式，内容ともに完成度が高いからである。今回の授業で扱う高啓「尋胡隠君」と王之渙「登鸛鵲楼」，王翰「涼州詞」は，絶句としてたいへん優れた作品である。中国ならではの雄大な景色と細やかな心情の表現が見事であり，同じ短詩型でも，和歌とはまた異なる魅力をもつ。時代や国を超えて，作者と現代に生きる私たちを結ぶ共通の感性があることを思い起こさせる作品である。

本学級の生徒は，第１学年で「故事成語」，第２学年で「漢詩」を既に学習している。その際，「返り点」や「送り仮名」といった訓読のきまりについても学習し，漢文を正確に朗読する経験を積んできている。しかし，詩の読解については現代語訳を参考に，全体的な場面を把握する段階にとどまっている。昨年度第３学年生徒を対象にした授業実践により，漢和辞典，特に「同訓異字」を活用させ，漢字の音や意味，語の役割等を考えながら漢詩の情景を読み進めることで，内容の理解を深め，学習への興味・意欲を高めることがわかってきた。

そこで今年度も引き続き，漢文を「漢字文化」の学習の中に位置づけ，言葉（＝漢字）そのものに目を向けた指導を試みる。今回の学習では，絶句四行のうちいくつかの句を伏せておき，自分が作者ならば示された漢字をどう組み立てて句を創作するかを考えさせる。この学習の中では常に，読者として「漢詩を読む」ことと，作者として「漢詩を詠む」ことを往還させる。まず，「漢詩を読む」として，作者が描く場面・風景・心情を自分の言葉で読み取らせる。次に，「漢詩を詠む」として，漢語の構成を考えながら，

示された漢字を並べ替えて詩を創作させる。その際，対句や韻といった技法にも着目させる。元の詩を正解として求めるのではなく，どういう意図で言葉（＝漢字）を選択し，構成したかを丁寧に考える学習を通して，漢詩の世界を身近に感じさせることができるような指導を試みたい。

指導目標

1．隠された句を想像し，漢詩を完成させることを通して作者の表現した世界を身近に感じることができるようにする。
2．漢語の構成や漢詩の技法を学び，漢字の意味や役割を和語との比較を通して考えることができるようにする。

指導計画

1．熟語の構成，漢文訓読のきまり，漢和辞典の使い方を学ぶ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３時間
2．漢詩三編「登鸛鵲楼」,「尋胡隠君」,「涼州詞」を読む　・・・・・・・・・・　３時間（本時はその２時間目）

本時の目標

漢字の意味，用法を考えながら句を構成する活動を通して，漢詩の情景を読みとることができる。

「学びのつながり」の視点

Ⅰ期～Ⅲ期の発達段階に応じた学習の中に，漢字を表現手段としての「文字」と，歴史的な背景を踏まえて作品世界に親しむ「文化」としての両面を取り入れていく。特にⅢ期の学習では，既に獲得した漢字の読みや意味，成り立ちという「生活知」を根拠として，漢詩を読み味わうために獲得すべき「科学知」とののぼりおりを設定する。生徒が，詩の言葉に表現されたもの（＝目に見えるもの）から詩の言外に表現されたもの（＝目に見えない意味や情感）に気づき味わうことで作品を読み深められるような取り組みにしたい。

学習の展開

学習内容・活動	指導上の留意点　（◆評価）
1．目標を把握する（５分）	
漢詩「尋胡隠君」（高啓）を作者になりきって詠もう。	
	○ゴールの姿（＝詩の情景を読み解く）の具体を生徒と共有しておく。 ○これまで学習したこと（漢語の構成，漢詩の形式ときまり）を活かして考えていくよう促す。
2．詩の言葉に着目し，読み深める。(35分) □本時に学習する作品を知る。 ・詩の形式を確認する。 ・詩の情景（どこで，誰が，何をしているか）を起句と転句の言葉を手がかりに読む。	○五言絶句であること，詩のリズムを作る技法（押韻や対句）について意識させておく。 ○承句と結句は隠しておく。 ○起句と転句は，書き下し文も示す。

□起句「渡水復渡水」（水を渡り復た水を渡る）の意味を考える。 ・「渡水」＝「川を渡る」 ・「復」･･･動作が繰り返されていることを知る。	○五言の中で「渡水」を二度も繰り返す起句の構成に注目させる。 ○返り点,送り仮名を示す。
□二句目の漢字を並べ替えて承句を作る。その際，次の３点について考え,プリントに記入する。 ①起句を承けて作者は何をするだろうか。 ②示された漢字をどのように組み立てると①の内容を表すことができるだろうか。 ③書き下し文にしてどう読むか。	○まずは自由に予想させる。 ○二句目の漢字を示す。 花，花，看，看，還，或 その際，「看花」の行為を繰り返す意にするためには「還」と「或」のどちらが良いか考えさせる。 ○思いつかない場合は，起句と承句は作者が見た風景を表現していること，対句になっていることに気づかせる。 ○できるだけ返り点,送り仮名もつけるように言う。
□個人で考え,発表する（個人→クラス）。承句を完成する。	◆起句との対句であること，「還」と「或」の意味の違いを踏まえて承句を構成し,内容を読み取ることができているか。【読むこと】 ○起句と承句が対句になっていることと,返り点,送り仮名をどのようにつけるかを確認する。
□転句を読む ・書き下し文「春風○江上の路○～」に助詞を補って読み，情景を想像する。	○書き下し文は「春風江上の路」と示し，結句につなぐために必要な言葉を補うようにさせる。
□四句目の漢字を並べ替えて結句を作る。その際，次の３点について考える。（個人→班） ①転句の続きとして作者はどうする（どうなる）だろうか。 ②示された漢字をどのように組み立てると①の内容を表すことができるだろうか。 ③書き下し文にしてどう読めば良いか。	○四句目の漢字を示すが，１文字は空白にしておく。 不，覚，到，君，□ ○五言の場合，前半２・後半３の語のまとまりになっていることを意識させる。 前半２･･･いつの間にか，知らぬ間に 後半３･･･君の□にたどり着いた ○どこにたどり着いたのか，どのように歩いて行ったのかをイメージさせる。
□互いの考えを交流し（班→クラス），結句を完成する。	○そのように考えた理由（イメージ）とともに発表させる。 ○出てきた意見を整理しながら全体に示す。 ◆漢語の構成と詩の内容の両方を考えて，結句を構成し,内容を読み取ることができたか。【読む

	こと】
３．本時のまとめ（10分） □漢詩を訓読する。 □再度どのような情景か全体を読む。 ・景･･･春，花が咲く美しい村，暖かな春風，散歩の途中で見た風景 情･･･のんびり，心地よさ，友（恋人）に会う嬉しさ等	○承・結句は，生徒から出た意見に従って読む。
□交流によって理解が深まった点をプリントに記入する。	○本時で学んだことを,生徒の言葉を用いて伝える。

【参考文献】　浜岡ほか.『中学教育』第46集．東雲中学校．2013．pp15-22
一海知義.『漢詩入門』．岩波書店.1998.
小川環樹他.『唐宋詩集』筑摩世界文學体系８.筑摩書房．1980.
八木章好.『時をこえるうた　漢詩』．国土社.2012.